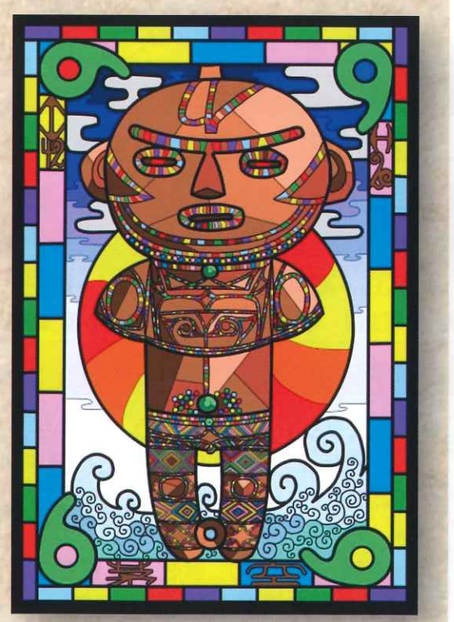
会員メッセージ

イラストレーター　上田忠太郎

「縄文」の暖簾をくぐったのはもう一昔前。
私は絵を描く仕事をしておりますが、その暖簾をくぐる少し前も日々アイディアの基（もと）を探しておりました。
意外と郷土史に弱い事に気付き、先ずはと博物館の公開講座で始めた擦文時代の勉強の最中、何となく参加した「土器作り」と「野焼き」を通じ、学校の歴史の授業以外では初めてとも言うべき縄文に触れました。
当時の私は縄文時代やその遺跡、土器や土器片に全く興味がなく、土器は遮光器土偶を辛うじて知っている程度の知識。
埴輪とどう違うのか見当もつきませんでしたが、回数を重ねるうちにこのグルグルウネウネは曽利式かな？この工字文は大洞式かな？などと考えるようになるなど、気付けば北海道と東北の縄文遺跡を相当数訪ねているほどの縄文漬けでした（笑）。

近年は縄文をテーマにしたイラストの合同展に参加させていただいたり、個展を開催させていただいております。
知れば知るほどに日本人の原点の様なものを強く感じ、その奥深さに魅了され更に探求したくなってしまう。
その「縄文」が目前と迫った世界遺産登録候補。
先人・諸先輩方の弛まぬ努力が、一見敷居の高い学問世界の縄文から、今日の親しみやすい縄文へ、今まさにかつてあったであろうかと思うほどに門戸が大きく開いていると実感しております。
日本は言わずもがな、世界の人々にまで広く知れ渡る日を最近では今か今かとソワソワしながら待ち遠しく思っております。
それにしてもこの不思議で素敵な「縄文」という暖簾の先は魅惑の底なし沼。
私自身はここから当分抜け出せそうにありません。



上田忠太郎さんのイラストを見に行こう！
「MON ♥MON 縄文展 2017 ～それぞれの縄文考～」
CAFÉ ESQUISSE カフェエスキス（札幌市中央区北１条西２３丁目１－１）
9／28（木）～10／24（火）12時～24時　水曜定休　10/17臨時休業

編集後記

◎ 「北の縄文」秋号の発行にあたり、石森先生を始め多くの皆様からご寄稿をいただきお礼申し上げます。
編集局一同は「縄文力」全開で縄文文化の発信に努めて参ります。（T．H）
◎ 秋と言えば食欲の秋！縄文人にも馴染み深かった「栗」を使ったメニューに挑戦したいです！（I．K）
◎ もうすっかり秋ですね。そろそろ紅葉狩りに行きたいなあ・・。（M.S）

編集・発行：北海道・北東北の縄文遺跡群の登録をめざす道民会議　編集長　谷　紘道　編集委員　井上香織、村上志保子
TEL：011-221-1122　FAX：011-221-0117
http://www.jomon-do.org/ E-mail ebisutan@cbt.chuo-bus.co.jp

北の縄文道民会議 Hokkaido Jomon Culture Promotion Council

HOKKAIDO JOMON CLUB NEWSLETTER
北の縄文 秋 2017
VOL.5

平成29年10月発行

目次

■北の縄文コラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
■縄文夏まつり　北の縄文セミナー@チカホ・・・・2～4
■縄文トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
■よもやまばなし／構成資産から／道内各地の活動状況・6
■縄文イベント情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
■会員メッセージ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

北の縄文コラム

「世界遺産、日本遺産、北海道遺産、市民遺産」

今年７月末に開催された国の文化審議会世界遺産部会で、「北海道・北東の縄文遺跡群」は５年連続で推薦が見送られ、「百舌鳥・古市古墳群」の推薦が決定された。真に残念であるが、今年度の審査結果を踏まえて来年度に向けて再検討を加える必要がある。ユネスコの諮問機関で候補地の事前審査と登録する価値の有無を勧告するイコモス（国際記念物遺跡会議）による審査が年々厳しくなっているために、関係団体・関係者は叡智を結集して大願成就を図る必要がある。

一方、今年４月に吉報がもたらされた。日本遺産の第３次選定で、ようやく北海道のストーリーが選ばれた。一つは江差町が申請していた「江差の五月は江戸にもない：ニシンの繁栄が息づく町」、もう一つは函館市と松前町が他県の市町と組んで申請した「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間：北前船寄港地・船主集落」。日本遺産は地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーで、有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外への発信によって地域活性化を図ることが期待されている。

北海道ではすでに「地域の宝」としての北海道遺産が選定されている。北海道遺産は次の世代に引き継ぎたい北海道の大切な宝物で、豊かな自然、先人たちの歴史や文化、生活、産業など、有形遺産だけでなく無形遺産も対象。01 年と 04 年に道民参加で 52 件の北海道遺産が選定されている。北海道遺産協議会は来年の「北海道 150 年事業」の一環として北海道遺産の追加選定を予定している。イオン北海道やマックスバリュ北海道は「ほっかいどう遺産ＷＡＯＮ」による売上の一部（16 年度は約 1500 万円）を北海道遺産協議会に寄附している。サッポロビールや伊藤園からも寄附金が贈られている。

少子高齢化で地域衰退が顕著になる中で、各地で貴重な地域資源や各種の「文化財未満の文化遺産」の喪失・消失が生じている。そういう厳しい状況の中で市民による文化遺産の保護と活用が重要になっている。例えば、福岡県太宰府市では「太宰府の景観と市民遺産を守り育てる条例」が 2010 年に制定されている。「・・市民一人ひとりが主体となり、良好な景観の形成と太宰府市民遺産の育成を図り、市民、事業者及び市がそれぞれの立場や役割を理解し、連携、協働することを決意し、愛情と誇りあふれるまちの継承と創造を行うため、この条例を制定する」とされている。

文化遺産の保護・管理・活用・未来への継承のためには、特定財源と専門的人財の確保が不可欠である。寄附金、宿泊税、ふるさと納税などで財源確保を図ると共に、ヘリテージマネジャー（多様な文化遺産の保護・管理・活用を担う専門家）の養成が不可欠だ。地域振興の王道は、歳月をかけて民産官学の協働で自律的に地域資源の持続可能な活用を図ることである。

北の縄文道民会議 副代表　石森　秀三
（北海道博物館長）

縄文夏まつり　北の縄文セミナー＠チカ

平成29年7月6日～9日、札幌駅前通地下歩行空間イベントスペースにおいて開催した「縄文夏まつり」の「北の縄文セミナー＠チカホ」では、３名の講師にご講演いただきました。その一部を抜粋してご紹介いたします。

恵庭の漆文化

－ カリンバ史跡と西島松５遺跡 －

恵庭市郷土資料館　主査　長町　章弘　氏

恵庭の史跡カリンバ遺跡と西島松５遺跡から、縄文後期の漆製品が数多く見つかっています。恵庭は縄文の漆塗り装身具が、日本で一番多く発掘されており、全国の漆塗り装身具の約半分が見つかっているとも言われています。縄文後期、約3,000年前の恵庭では、非常に高度な漆文化が発達していました。今日はそういったお話をしたいと思います。

恵庭で一番古い人類の痕跡は約１５,０００年前のもので、千歳市との境界付近で石器が見つかっています。一番古い竪穴住居跡は約7,000年前のものです。恵庭は西の山岳地帯から東の低地帯へ多くの小河川が流れており、遺跡はその河岸段丘上につくられています。

カリンバ遺跡は、恵庭駅東口の土地区画整理に先立ち、恵庭市教育委員会が平成１１年に発掘調査を行いました。その際、複数の人を埋葬した合葬墓が４個見つかり、そこに埋葬された人たちは数多くの漆塗り装身具を身に着けていました。漆製品は遺跡全体で１４０点を超え、その質と量が前例のないものであったことから、平成１７年に遺跡は史跡に指定され、翌年には合葬墓の出土品が重要文化財に指定されました。代表的な合葬墓である１２３号墓を紹介します。遺体は土に還っていますが、わずかに残った歯の痕跡や装身具の位置などから５人が埋葬されたと推定されます。

漆塗り装身具は、櫛や腕輪、耳輪、額輪など数多くの種類があります。櫛は透かし模様を入れた櫛と透かしのない櫛があります。遺跡全体で５７点の櫛が出土していますが、透かしのある櫛とない櫛はほぼ同数です。櫛の色も発掘した直後はもっと鮮やかで、赤や朱色以外に、オレンジやピンク色など赤系統の色が５種類ほど見られました。赤い顔料であるベンガラや水銀朱、またその粒子の大きさなどを使い分けるといった非常に高度な技術を用いていました。櫛は髪を整えるというよりは、だんご状にした髪に挿すことで身分などを現した可能性が考えられます。１２３号墓に埋葬された５人のうち中央に葬られた人は、漆を塗った腰飾り帯を身に付けていました。他の合葬墓である１１８号墓と、１１９号墓でも、それぞれ一人が腰飾り帯を巻いていたと考えられます。恵庭市では、この腰飾り帯を身に付けた人が神に祈る人、すなわちシャーマンのような人だったのではないかと推測しています。想像をたくましくすれば、合葬墓のそれ以外の人はシャーマンの付き人で、シャーマンの死後に一緒のお墓に埋められた「殉死」だったのかも知れません。

▲１２３号墓から出土した装身具

西島松５遺跡は、洪水を防ぐ遊水池の工事に先立ち、（公財）北海道埋蔵文化財センターが平成１６年に発掘調査を行いました。ここでも漆塗り装身具を身に着けて埋蔵された人々のお墓がたくさん見つかり、出土した漆製品の合計は１４０点以上にもなりました。

数年前、漆芸の人間国宝である室瀬和美（むろせかずみ）さんがカリンバ遺跡の漆製品を見に恵庭を訪れました。その際、現代のような道具がなかったであろうカリンバ遺跡の漆製品の漆膜が薄いことに驚き、漆を薄く塗るのは高度な技術であり、前時代からの技術的な蓄積があったのだろう、とおっしゃいました。

恵庭では両遺跡以外にも柏木Ｂ遺跡で約3,000年前漆塗りの櫛８点が見つかっており、ユカンボシ川沿いの２つの遺跡では、それより少し古い時期の漆塗り櫛も発掘されています。また、西島松３遺跡では、約5,500年前、縄文前期の漆塗り繊維製品も出土しています。今後も他の遺跡から漆製品が見つかるかもしれません。ただ、ウルシノキが自生していなかったであろう約3,000年前の恵庭の地に、高度な漆文化が花開いたのかは大きな謎です。

重要文化財の漆製品は通常複製品を展示していますが、毎年秋に実物を公開しています。その時はぜひ恵庭にお越しください。

縄文文化の終焉と北海道のあゆみ

「続縄文」ってみなさん知ってますか？

室蘭市教育委員会生涯学習課
主査　松田　宏介　氏

縄文文化は、約１万５千年前から１万年以上に渡る日本列島の先史文化です。今の私たちと違う特徴としては、やはり狩猟採集社会であること。自然の中から食べ物をいただき、土器、石器など、様々な道具を使った生活をしていました。

なかでも土器は、鍋として使用された道具ですが、これにより、食べ物を煮たり貯蔵することができるようになりました。食べ物を蓄え、火を通して食べることができるようになった結果、一年を通じて一つの地域に住み続けるという、定住した生活ができるようになったのです。こうした縄文の集落の典型的な一例として、伊達にある史跡北黄金貝塚があげられます。貝塚や竪穴住居跡があり、定住生活を送っていたことがわかります。

「石器、土器を使っていた」と言うと、時代遅れ、原始的といったイメージをいだきがちですが、縄文の人達は、非常に豊かな精神性を持っていたということがわかっています。土偶、土面、ストーンサークルなど、墓や儀式に使用されたと考えられています。函館市南茅部から出土した道内唯一の国宝「中空土偶」（カックウ）は、そうした代表的な一例になります。

また、縄文の貝塚を発掘すると、お墓が見つかることがあります。こうしたお墓の発掘は明治時代から行われていますが、貝塚から出てきた人は、今の私たちとどのような関係があるのかについて、戦前から様々な論争が繰り広げられてきました。今ではDNA 分析なども用い、現代日本人が歴史的にどのように形作られていったか、現在も研究が進められています。

さて、こうした縄文文化は、どのように終わったのでしょうか。縄文の人たちは１万年以上の長い期間にわたり、地域の様々な状況に合わせて生活をしていましたが、約２千数百年前に、水稲文化が広がっていく中で、縄文文化が終焉を迎えるというのが、日本全体での歴史の流れになります。一方、北海道内では、米作りをする社会にはならず、それ以前と同じ狩猟採集の生活が続いていた。これを今日、「続縄文」（ぞくじょうもん）と呼んでいます。

続縄文と言う言葉を初めて聞く人もいるかもしれませんが、今では、日本列島における地域ごとの多様な歴史の一つとして、高校の授業などでは教えられるようになってきています。

「本州では米作りが行われたが、北海道では行わなかった」と言うと、どうしても停滞的なイメージで捉えがちですが、それを変えたのが、伊達の有珠モシリ遺跡の発掘調査です。有珠湾にある小さな島全体が遺跡となっているのですが、ここではお墓が複数基検出され、人骨と共に、銛頭というイルカ等を突き刺すのに用いた道具や、石斧などが豊富に副葬されていました。こうした出土品の中でも、特に考古学者を驚かせたものがあります。それは北海道では自生しない、沖縄の海でしか採れない貝を使ったブレスレットです。この貝輪の存在から、当時道内の続縄文の人たちが、南海の遠隔地とも交流していたことが明らかになったのです。

有珠モシリの調査事例を踏まえて考えると、続縄文は決して停滞的な生活ではなく、それ以前よりもはるかに活発に、より遠くの人たちと交流していたことがわかっています。

こうした「続縄文」が、そもそも提唱されることになった契機は、室蘭市の本輪西貝塚の発掘調査になります。縄文研究を打ち立てた研究者、山内清男（やまのうちすがお）が、大正１５年にこの遺跡で発掘調査を行い、本州と北海道では、縄文以後の生活、すなわち歴史の歩みが違うことを明らかに

▲現在の本輪西貝塚（室蘭市）

続縄文は、縄文以来の様々な伝統を、社会の中で色濃く受け継いでいます。また、本州や、九州、沖縄など遠隔地とも交流をもっていました。縄文から続縄文は、狩猟採集という地域に根ざした生活の営みにおいて共通し、それが遺跡という形で現在確認されるのです。